植民地朝鮮で伊藤博文祭る

知られざる曹洞宗「博文寺」

一戸氏が新著で実態紹介

博文寺で謝罪の法要に参列した安俊生（右から4人目）や上野佳職（その左）とされる写真＝一戸氏提供

韓国統監府の初代統監を務めた伊藤博文を祭る寺が日本統治時代の京城（現ソウル）に存在し、曹洞宗が管理していた事実はほとんど知られていない。同宗雲祥寺（青森県五所川原市）の一戸彰晃住職（62）は今月上旬に出版される著書の中で、その実態を反省の念を込めて紹介する。「植民地政策推進に直接関わった寺。歴史をきちんと検証することが日韓仏教の真の友好につながる」という。

一戸　彰晃氏

伊藤の雅号を山号、名を寺号にした「春畝山博文寺」。新著『曹洞宗は朝鮮で何をしたのか』（皓星社刊）で、同宗との密接な関係が明かされる。一戸氏は戦時中の曹洞宗の動向研究がライフワークで、一昨年には中国での従軍布教師の活動を詳述した『曹洞宗の戦争』（同）を上梓している。

一戸氏によると、博文寺は昭和7（1932）年に竣工した「宗教的に植民地支配を支えた国策寺院」。非業の死を遂げた伊藤の菩提を弔うとともにその功労をたたえ、日本統治の正当性を朝鮮民衆に誇示する狙いがあったという。当時、特集を組んだ朝鮮総督府の機関紙『京城日報』には、伊藤を「本尊」とする別格寺院で檀信徒を持っていないとの記述がある。場所は現在のソウル市中区奨忠洞で、本堂の跡地には新羅ホテルの迎賓館が立つ。

本堂は、朝鮮神宮や東京の築地本願寺なども手掛けた建築家・伊東忠太が設計。地上2階・地下1階建ての鉄筋コンクリート造りで、二重屋根に鴟尾の付いた豪壮な神宗様式の寺院建築だった。

伊藤の部下で、朝鮮総督府政務総監だった児玉秀雄が顕彰組織を立ち上げ、政財界などから45万円に及ぶ事業費を募った。日銀の企業物価指数を基に現代の貨幣価値に換算すると約3億7千万円に相当する。

歴代住職は、初代で後の大本山永平寺第69世貫首・鈴木天山をはじめ、曹洞宗で高位の僧侶が務めた。伊藤が禅の教えを信奉し、同宗第6代管長の森田悟由・永平寺第64世貫首と親交があったのが機縁だと思われる。鈴木は森田の直弟子。

博文寺は主に総督府主催の戦死者慰霊法要や戦勝祈願などの会場に使用された。当時の絵はがきに浴衣のような着流しの人物が写り込んでいることなどから、日本人の観光コースになっていたのではないかという。

伊藤を暗殺した独立運動家・安重根の次男、安俊生を謝罪させる法要が営まれたこともある。暗殺事件からちょうど30年後の昭和14（1939）年10月。当時の『京城日報』によると、法要は、上海で薬器商を営んでいた俊生が博文寺の存在を知り、総督府に「父の罪をわびたい」と願い出て実現。俊生は伊藤の「尊影」の前で焼香し、上野佳職住職から父の位牌を授かった。同紙は「朝鮮統治の偉大なる変転史」「内鮮一体もこゝにおいて精神的思想的に一致した」と高揚した筆致で論評している。

一戸氏は著書で、この法要の一連の経緯を総督府が台本を書いた「やらせ芝居」だと断じ、「曹洞宗が協力した事実は永久に記憶されねばならない」と記す。

博文寺は戦後の混乱期に破壊されたとみられるが、どんな末路をたどったかははっきりしない。「放火されたとか、一時、安重根の記念館として使われていたとかいう説もある。今後、日韓の仏教交流が進む中で明らかにされていくのでは」と一戸氏。

「日韓仏教界は歴史問題でまだお互いに遠慮したり、牽制している状態。これを突破するためには日本の仏教者の主体的な懺悔が必要だ」

（佐藤孝雄）